

<報告>異界への旅：生と死の接点を探る(第18回医療短大研究会)

著者	山形 孝夫
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	10
号	2
ページ	167-167
発行年	2001-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/33770

[報告]

第18回医療短大研究会

平成12年5月25日(木) 18:00-19:00

医療技術短期大学部 大講義室

演題:「異界への旅—生と死の接点を探る—」

講師: 山形孝夫先生(宮城学院女子大学元学長・
同大学名誉教授)

「生と死の接点を探る」という副題にも見られるように、本講演は、医療について学ぶ本学において、密接な関わりと持つと共に根源的な問題を取り上げたものであった。講演は、アフリカでのフィールドワークから「死者は生きている」、「生きている死者」というような表現を説明することから始まったが、難解な概念の説明がなされるといような印象は決してなく、最後まで大変聞きやすいと感じる講演であった。

講師の山形先生は、ホスピスやターミナルケア、子ども虐待防止などにおいて草分け的な活動을 続けてこられた方であり、豊富な臨床経験やフィールドワークに根ざした話題は、大変興味深く、惹きつけられものであった。具体的には、ホスピス病棟で患者と共に自然を眺めながら、心ならずも患者に死期が近いことを悟られてしまった体験、アフリカにおいての修道士達の修行動機を聞き出すための奮闘ぶり、そして沖縄での洗骨の風習とその意味、更には葬送に関わる様々な風習や儀式が持つ意味についてなどが紹介された。

山形先生はご自身の研究領域を、宗教人類学として紹介された。そしてそのポイントを、「歩いて、見て、聞いて、一緒に暮らしてみても……」と表現されていたが、講演全体を通じて実証性の高い貴重な話題が網羅され、アフリカでの貴重なスライド投影とも相まって、当該領域の研究手法や特徴を理解することができた講演であった。(文責 堀川)

第19回医療短大研究会

平成12年7月25日(火) 18:00-19:00

医療技術短期大学部 大会議室(事務室隣り)

演題:「言語聴覚士の役割と現状」

講師: 目黒祐子先生(東北大大学院医学系研究科
高次機能障害学分野研究員)

第20回医療短大研究会

平成12年11月25日(土) 17:00-18:30

演題:「21世紀の子育て支援を考える—母性神話の解放を求めて—」

講師: 大日向雅美先生(恵泉女学園大学教授)

平成12年11月25日(土) 18:40-20:00

東北大学医学部 良陵会館

主催: 宮城学院女子大学・東北大学医療技術短期
大学部共催

シンポジウム:「21世紀の子育て支援の課題」

話題提供 小原 紀子(育児サークル「どんぐりの会」)

畑山みさ子(宮城学院女子大学教授)

柳原真知子(東北大学医療技術短期大学部助教授)

指定討論者 大日向雅美(恵泉女学園大学教授)

古代ローマ帝国の時代から「女性が子育てを嫌がっている。今の母親は母性を喪失してしまったのか」と言われてきた。時代と共に子育ては変化してきており、それぞれの時代特有の問題点がある。現在の問題は、1960年代の高度経済成長時代以降の核家族化の定着により、女性が歴史の中で初めて本当に自分1人で子育てをしなければならなくなったことである。現在の日本の母親、特に専業主婦の母親は、孤立した状態で育児をしている。母親たちは「1人になれる時間がない」「夫が相談にのってくれない、話し相手がいない」ことを、最も辛いこととしてあげている。最近は育児を行う父親もみられるようになったが、まだまだ